

ミンダナオ子ども図書館の

スカラシップと里子支援



あなたと偶然出会ったことで
あなたの人生と私の人生とが
一つの糸でつながって

愛と友情で絡み合いながら
想像も出来なかった将来が
願っても願っても

かなえられなかった未来が

ヒナイヒナイ バスタ カヌナイ

ゆっくりゆっくり 切れることなく

永久とわかに向かって歩み始めた

私の生きている時間と

あなたの生きている空間とは

とっともかけ離れているけれども

違っているからこそ

お互いに支え合い

お互いに助け合い

お互いに愛し合って

今の厳しい困難を

手を取り合って超えていける

あなたと偶然であったこと

あなたの人生と私の人生とが

一つの糸でつながって

愛と友情で絡み合いながら

想像も出来なかった将来が

願っても願っても

かなえられなかった未来が

ヒナイヒナイ バスタ カヌナイ

ゆっくりゆっくり 切れることなく

永久とわかに向かって歩み始めた

ミンダナオ子ども図書館の

スカラシップと里子支援

ミンダナオ子ども図書館は、フィリピンの南の端、ミンダナオ島にある現地法人NGOです。政治や特定の宗派の元では行動しない原則を持っています。現地では、Mindanao Children's Library Foundation, Inc. というのが、正式名称で略してMCLと呼ばれています。

根幹をなす活動は、「読み語り」と文化活動」で、子どもや若者たちが活動の中心を担っています。「二次的活動として」医療「スカラシップ里子」「子どものシェルター」「保育所建設」「植林支援」があり、状況に応じて「戦闘や洪水避難民救済・平和構築」を許可を得て活動しています。この紙面では、その中のスカラシップ里子支援について説明します。

MCLのスカラシップは、他のスカラシップ支援とは、だいぶ違っている面が多いので、支援者の方々、特にこれから支援して下さる方々に、よく理解していただいていた方が良いと感じるからです。

ご存じのようにミンダナオは、イスラム教徒と先住民族と島外移民が混交して来た400年の歴史があります。本来平和に暮らしてきたのですが、ここ40年にわたり開発による貧富の格差が広がると同時に、国際的な農業資源や鉱山利権

を目的とした大小の戦争が起こされて来ました。以外と知られていないのですが、国連の調べによりますと、ミンダナオは戦争避難民の数が、累計で世界一です。その大きな犠牲になっているのが、イスラム地域と先住民族の地域です。MCLのスカラシップは、原則としてイスラム教徒、先住民族、移民系クリスチャンを3分の1づつ平等に採用し、貧困撲滅と平和構築を目的に始められています。

MCLのスカラシップは、学校や教会に依頼して成績優秀者を探すのではなく、自ら極貧の集落や反政府地域に赴き、そのなかでもとりわけ不幸な境遇に置かれている子を採用します。第一基準は極貧で特に親のない子、片親の子、崩壊家庭の子で、第二基準が親はいても極貧で生活に困窮している世帯の子です。MCLでは、彼らに、小学校から大学まで行ける可能性を提供しています。

学校教育を主目的としたスカラシップではなく、大学まで行けると同時に、とりわけ不幸な環境に置かれた子たちが、読み語りや難民救済、植林などのボランティア活動を行い、その過程で学校教育では学べない地域の現実を学び、精神的に自立再生していくためと、そのような彼らに、幸せな未来の可能性を託すために作られた、ちょっと変わったスカラシップです。

ミンダナオ子ども図書館の基幹をなすのは、読み語り。活動の中心は、子どもたちや若者たち。

読み語りをする場所は、山奥の先住民の極貧集落だったり（徒歩や馬で行くときもある）、イスラムの反政府地域で、一般の人々やNGOでも入れない湿原地帯だったりする。僻村のなかでも僻村、極貧のなかでも極貧、危険な中でも最も危険な戦闘地域だったり・・・

「なぜ、日本人がたった一人で、そのような地域に入れるのか」と、よく聞かれるが、最初はほくも、興味はあっても絶対に入れないと思っていた。

しかし、ただひたすら貧しい子どもたちのことを想い、戦争や極貧からくる家庭崩壊で劣悪な生活環境のなかに、本人の意志に反して置かれてしまっている子どもたちのために、時には戦渦をかくぐって活動していると、それがたとえ有名な反政府や戦闘地域の村々であったとしても、人々が心を開いて受け入れてくれる。

そのような活動を、日本人が一人で出来るわけはなく、活動の中心を担ってきたのは、現地の子どもたちや若者たちだ。スカラシップを始めた理由も、現地の若者に頼るしかなかったからだ。

現地法人の資格を取ったのも彼らだ。



現地で読み語りをする時、集まってくる子どもたちの中に、「これはひどい、何とかしてあげたいなあ」という子どもたちが出てくる。

戦闘で避難民化していたり、極貧で現金収入がほとんどなく、病気になることも買えず、学校にも行けず、日々の食事や服にも困っている子どもたち。そのような子たちを目の前にすると、どうしても放っておけない。それがスカラシップや医療、古着や植林プロジェクトを始めたきっかけだった。寄付の90パーセントは、個人寄付で、寄付はすべて現地へがモットーだ。

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」または「里子」と書いて一部振り込んでいただければ、支援学生を紹介。機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、6月に成績表、8月に写真、12月に絵手紙。里子支援は、8月に写真、本人からは、12月に本人が描いた絵手紙が届きます。訪問の際は、自宅にご案内します。基本的には卒業までですが、支援停止は、いつでも可能です。

MC Lの根幹は自由寄付。

まずMC Lの寄付について復習してみると。最終ページにもあるように、寄付の種類には、自由寄付、スカラシップ、里子支援、保育所・下宿小屋支援、植林支援、物資支援などがある。

だが、支援の根幹は自由寄付。

自由寄付は、親のいない子や学校が遠くて通えない子たち120名と一緒に生活している本部の食費。遠くて学校に通えない高校生たちのための、男女二カ所の下宿小屋、大学生の町の下宿施設。お昼のお弁当を持っていけない村の子たち



の炊き出しの米など、すべての子たちを

合わせる250名あまりの子たちの米代（一日100キロ以上の米が消費される）や生活維持費だけではなく、広範な活動範囲を支えるガソリン代、車の維持修理費。さらに加えて620名を越える子どもたちや関係している多くの僻村の子どもたちの手術まで含む医療費（去年は130名ほど、医療費は毎年総額は、150万円ほど。大規模な戦争が起こるともっと大変）、緊急の戦争や洪水避難民救済費などに使っている。

貧困集落のもう一つの大きな問題は、学校に行きたくても行けない子たちがたくさんいること。

行けない理由は、現金収入がないので、学用品が買えない。一日三食食べられないのに、お弁当など持っていけないわけではない。学校まで遠くて通えない。

貧困といっても、豊かな日本に比べると想像もつかない状況がここにはある。米は買わなければならないので、当然ながら現金収入がなければ食べられず、自然薯を掘って一日二食で食いつなぐ。特に父親が死んだらいなくなったりした、母子家庭は深刻だ。

鶏肉を食べられるのは年に数回、父親の誕生日やクリスマス時のみだけ。日常は、沢で捕れるカエルやカニがごちそうで、

普段は、ワラビなどの山菜をおかずにするけど、調味料の塩や醤油や油もなかなか買えない。そのせいか、山の子たちは小柄でやせている子が多い。

年齢がくると小学校に登録するものの、2年生になると多くの子どもが学業停止。理由は、午後の授業が出てくるとお弁当を持っていけないから。

読み語りに行った僻村で、そんな子どもたちの現状を見せつけられると、「何とかして、この子たちが望む学校に、通わせてあげたい。」「高校卒業すら、夢のまた夢、だからこそ、出来れば大学まで行かせてあげたい。」と考えてしまうの

は、ぼくだけだろうか。

大学に行けるのは、20パーセントにも満たない金持ちだけだ。

大学を出たからって、ぼくは特別な事だとは思わないが、こんな不平等を見てみると、彼らにこそ大学に行ってもらいたい、そして、少しでも社会を変えてほしい、と思った。スカラシッププロジェクトの始まりだった。

スカラシップ支援は、大学から高校へと下がついていったが、極貧の村を訪ねるにつけて、貧困世帯の子どもたちは、小学校すら卒業出来ない状況を見るにいたり、「これは、小学生の支援から始めなければ、スカラシップも意味がない」と感じ、小学校の子どもたちに教材やプロジェクト代、ときには炊き出し用の米をとどける里子支援を開始した。

そうした結果、現在（2013年）、奨学生数は、小学校から高校大学まで640名あまり。増やそうと思ったことは毛頭ないが、現地で子どもたちに出会うとどうしても放っておけない性格が災いして？この人数になってしまった。

しかも、まだ支援者が見つかっていないのに、見かねて採用するものだから、支援者がいないにもかかわらず、自由寄付で学校に行かせてあげている子が3分の1もいる。

子どもの紹介は、ウェブサイト 検索「ミンダナオ子ども図書館」の「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にさらに多く、順次最新の情報を載せています。 入るためのパスワードは、サイトからメールで問い合わせ。 サイトからそのままメールで現地スタッフと、支援する子どものご相談と確定が可能です。

それでも、がんばって無理をしても奨学生を採ってきたもう一つの理由は、MILF（モロ・イスラム解放戦線）などの戦争地域、特に舟でしか行けないリグアサン湿原やNPA（共産ゲリラ）の跋扈するアボ山周辺の山岳地域では戦闘が絶えず、こうした極貧の村々と信頼関係を持つことによって、戦渦のときに安全に子どもたちの救済活動に走ったり、

その後の平和構築のためにも、現地の子どもたち親たちと密接に関わりをもてるスカラシップや里子支援は非常に有益だということが体験からわかったから。

本来ならば、外国人が入れないような地域でも、私たちを受け入れてくれるのは、現地に奨学生たちがいて、村人たちと信頼関係が出来ているから。

また、40年にわたる戦闘で閉ざされてきた反政府の村々も、子どもたちが高校から大学にまで通えるようになるという、信じられないことが起こることで、外部世界に心を開く縁となっていくことがわかる。MCLが読み語りをしたり医



療をしたり、学用品などを届けに定期的に来るようになってから、村が明るくなったケースが多い。

MCLのスカラシップでは、高校生と大学生は、2ヶ月に一回、総会に本部に集まる。

総会は、奇数月の最終日曜日です。良かったら参加されてください！

5月がシンポジウムで、平和や貧困についてグループ討論をする。7月が先住民の文化祭。9月が移民系クリスチャンの文化祭。11月が卒業生も交えた奨学生の日。1月が、イスラム文化祭。3月が、卒業送別会。

こうした文化祭を行う理由は、学校教育だけでは、異文化や異なった宗教間の理解や交流が出来ないからで、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの他と異なった大きな特徴の一つは、学生総会にあると言っても良いだろう。

こうした交流を通して、普段は相容れないと思われていたイスラムやクリスチャン、文化が違うと軽蔑していた移民や先住民が、敬意を持って理解し合い、共感しあえる場が作られ、それがひいては平和構築の実践へと向かっていく。

学校教育だけで平和が作られるのであれば、すでに先進国は武器を持たず、世界はとっくに平和になっているはず。



ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの、もう一つの変った採用基準は、成績の優秀な子より、親のいない子や片親の子、崩壊家庭の子たちを優先していることだろう。

スカラシップも里子支援も、採用基準は、極貧家庭の中でも、特に厳しい環境に置かれた子たち。

- 一、孤児片親の子、崩壊家庭の子。
- 二、両親はいても土地もなく極貧で、3食たべられない家庭の子。
- 三、絶えず戦闘や戦争にさいなまれる平和構築に重要な意味を持つ地域の極貧集落の子ともたち。

例をあげると、戦闘で目の前で両親や兄弟が殺され、自分も腹部を撃たれてMCLに来た子。父親が殺された子は結構多い。父親や母親が町に行つたままいなくなり、母子または父子で、苦勞してきた子は数知れず。親の中には養育不能や拒否どころか、ショックと空腹が同時に襲い、精神に異常を来して徘徊したり、呆けてしまった親もかなり見ている。

再婚しても、継父が結構危なくて、保護者がいなかったり、一人で親戚の家にあずけられたり、働きに出ていると、しばしば起こるのがレイプやアビューズ。しかも小学一・二年生から・・・。

親戚の間を転々としているケースも多いが、親戚として豊かであるはずもなく、一族平均して7人の子どもたちがいるから、自分の子の内の一人でも小学校を卒業させるのがやつの所に、親がいなくなつた子も預かるとしたならば、お手伝いが下働きがせいぜいで将来のことまでは考えられない。

先住民の間では、女の子は、14、5歳で結婚するのが当たり前で、これも食べ盛りになる前の口減らしではないかと思うときもある。

ただ子だくさんが即刻悪いとはいえない。

ウェブサイトにも、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

平均して子どもが7人。生活は本当に大変だが、それはそれでにぎやかで良いし。子どもたちも、親がいかに苦勞しているかをよく理解しているから、早朝のご飯炊きから水くみ、掃除まで、本当によくお手伝いする。上の子どもたちは、下の子どもたちの面倒をよく見る。

貧困で崩壊する家庭もあるが、家族のきずな、地域の絆は貧困によってさらに強まることもあり、学校も、全員が行くのは無理だから、大概は長女や長男が家や畑を手伝って、下の女の子で勉強に興味のある子を、一人でも良いから小学校を卒業させるために、家族みんなでがんばったりする。

そのせいで、MCLのスカラシップに応募する子どもたちの応募理由はほとんどが、将来良い仕事を見つけて、自分の親や家族を助けたい、兄弟姉妹を学校に行かせたい・・・。

また、山のコミュニティでは、本当にお互いに家族同士が兄弟姉妹のように助けあう。

産児制限が浸透し核家族化、個人主義化した都会から失われた愛が生きていて、それが子どもたちの心を真に育てている様子がわかる。(ここでは、避妊具も買えないだけに、子どもは生まれて当たり前で、避妊失敗の産物ではない。)

こうした自立した子どもたち、互いに家族や友達通しで愛し合い助けあうことを理解している子どもたち、極端な不幸を経験しながらも自殺することもなく、真に生きる力を持っている子どもたち、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの子どもたちは、皆そうした子どもたちが多く、そこから先進国が学ぶべきこともほんとうに多い。

子育ては、競争原理に基づいた学校教育ではなく、愛と助け合いに基盤をおく家庭と地域社会と、大勢の子どもたちが共に外で思う存分走りまわって遊ぶ体験の中から生まれてくるのがよくわかる。

だが、やはり現代社会のなかで生きて行くには、識字や計算能力をはじめ、学歴や教育のあるなしが人生の後半を大きく左右させる。勉強が良く出来て、学歴が高い人々が、政府や企業のトップに立ち、政策や方針を決定し、高給に裏打ちされた安定した人生を送るのだ。

さらにそうした人々だけが、学費を

払って子息を大学までやらせ、縁故で地位を継続させていく様子を見ていると、あまりの不平等にため息が出る。だから世界は戦争ばかりで、格差ばかりが広がって、良くならない？

そんな社会が、ミンダナオには明確に広がっているのが見えるのだが、これはフィリピンの国内問題ではなく、実は先進国も含めた世界の構造的な問題であって、日本も負担している。(先進国が後進国を搾取することから、経済覇権が成り立っている)だが日本という狭い壁の中に閉じこもって、世界を見ようとしないう限り、理解することは不可能だろう。

そんなわけで、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、極貧の子たちの中でもとりわけ不幸な境遇の子たちに、大学まで行ってほしいと思っただけのプロジェクトだ。

しかし、全員が優等生でもないのに、基本的に、極貧状態から脱して人並みな生活が出来、結婚して幸せになってもらうことを目指している。

それゆえ進級進学出来ない子たちにも力を注ぎ、短期教育や縫製や大工、農業訓練や修理工、ドライビングの技術を習得させて、少しでも有利に社会に出ていけるようにしてあげてから、社会に送り出すようにしている。



スカラシップ・里子支援の方法

郵便振替用紙に、「スカラシップ」または「里子」と書いて、支援額の一部を振り込んでいただければ、後日、現地から手紙やメールで支援の子を紹介させていただきます。学年、男女、境遇、年齢、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族など希望があればお書きください。出来るだけご希望に添う子を、紹介させていただきます。

サイトなどの紹介欄に載っている特定の「この子を支援したい」場合は、メールか振替用紙の通信欄に子どもの名前を書いてお送りください。子どもの紹介は、ウェブサイトの「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にも順次、最新の情報を乗せていきます。入るのにパスワードが必要です。パスワードは、サイトからメールで問い合わせ。

奨学生の決定は先着順とさせていただきますので、サイトから「支援申し込み」をクリックして記入し、通信欄に希望の子の名前を書いてウェブメールしていただくのが一番早いと思います。折り返しスタッフから返事を送ります。すでに支援者が決まった子の場合は、別の子をご相談させていただきます。

ウェブサイト、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

つばさのミミズ

松居 陽

一人ぼっちの庭に、朝日が昇る。小鳥がしばふのミミズをついばむ。

愛には、欲求の対象も、執着もない。愛される者が、愛する者の中へと崩れ落ちる。対象が主体の中へと崩れ落ちる。それを否定できるものを残さず、全てをつなぐ愛だけが残る……

主体と対象は、恋に落ちることが出来ない。

それらは永遠に、橋をかけることの出来ない切れ目を境に、ただ憧れのまなざし



で互いを見つめ合う。

愛が橋をかけ、断片化にある孤立が、一体化にある喜びに道を譲ることを、日々待ち望みながら。でも、この切れ目に橋はかけられない。

切れ目があってからこそこの主体と対象だ。そう、切れ目は深く僕たちの経験の基礎に染み込んでいる。

愛するものと愛されるものは、根本から切り離されている。

彼らが本当に出会うことは、まずないだろう。

愛は、二人を隔てるこのむごい切れ目の死を意味する。それは、努力では達成できない。

分離を終わらせようとする努力そのものが、分離を強調し、分離に力を与える。なぜなら、分離などどこにもないからだ。そんなものは初めからなく、これからもない。分離は、幻想だ。幻想と戦えば、負けるしかない。

そんなわけで、われらが恋人たちは、知らず知らず自分たちで作った、橋をかけることの出来ない切れ目を境に、憧れのまなざしで互いを見つめ続ける。

彼らを助けることは出来るのだろうか？
一つになろうとする努力そのものが、よけ彼らを突き放す。

このように生き、死んでいくのが彼らの運命なのだろうか？
出口はあるのだろうか？

あるが、それには死がかかわる。肉体の死ではないが、自我の死だ。切り離し、孤立させる全ての死、過去から運ばれてきた全ての死、未来へと映し出されていく全ての死。愛という概念そのものの死。そしてついに、愛されるものの死、愛するものの死。

君と僕の死、それと共に僕たちの間に入り込む全ての死。無への落下、未知への突入。

リスク

リスクを冒すものは、味わうかもしれない。一人ぼっちの愛の、甘くシンプルなき喜びを。

見て！小鳥が露にぬれた芝生を飛び跳ねながらさえずり、私たちが地球と名づけたエデンの園にうたた寝する生き物たちを、朝日が暖かく呼び起こす。そこには、孤独も分離も見当たらぬ。

全ての中に全てがあり、そこらじゅうが母、そこらじゅうが故郷だ。

当たり前前のごとに気づき、笑みが漏れる。僕は君を見つけたのではなく、ずっと避け続けていたことを認めただ。

君は、そこにいるんじゃないって、ごんごんいるんだ。

君は、経験そのものとしての僕の、一部なんだ。だから、僕は君を愛してはいない。愛する僕と、愛される君はいない。君は、愛するものの一部だから……

大いなる探求は、今、ここに終わる。ここには愛しもなく、君しかいない。

君は僕が今感じているもの、君はどこからともなく泡立ち、どこへともなく解けていく思考、君はあの小鳥、草についた露、太陽とその輝きの全て。

僕たちは、こうして時を越えて縛られている。

僕たちは、別れない。別れられない。今も、これからも。

一人ぼっちの庭に、朝日が昇る。君は僕と一緒に、全てを目の当たりにする。



ウェブサイト、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

MCL流、平和構築の試み

松居友

戦闘の続くミンダナオで、最も困難な地域は、アポ山周辺の山岳地域とピキット市に隣接する湿原地域だ。ともに反政府組織と呼ばれているNPAとMILFの活動領域で、非常に貧しい地域である。前者はマノボ族等の先住民が、後者はムスリムと呼ばれているイスラム教徒の多い地域。

両地域は戦闘だけではなく、しばしば激しい豪雨に襲われる。森林伐採で保水力を失ったマノボ族の山々から、泥水は濁流となりイスラム教徒の住むリグアサン湿原に



流れ込み、多くの家々が胸を越す水に覆われ、洪水はほぼ一ヶ月にわたって続く。

山岳地帯の先住民は、本来は低地の豊かな平地に暮らしていたのだが、政府の政策でルソンやビサヤ、ネグロスなどから移住してきた移民に土地を買い占められて、さらに国際企業の後押しでバナナのプランテーションを広げるために、強制的に山岳地域に移住させられてきた。その方法は、アメリカ開拓時代にインディアンを追い出し、大土地所有を広げていった西部劇の手法そのもので、先住民を追い立てるために地域紛争を起こし、抵抗する先住民や貧民を反政府組織と名指しして、国軍を投入し避難民化させて、その間に開発を進めるといった手法なのだ。しかもそれが、なんと現在も進行している。

イスラム反政府地域の方は、40年に渡りかなり大規模な戦争が起こされてきたが、さすがにイスラム教徒の結束は、国際的でも堅く、結局排除はあきらめて、平和交渉に移行した。



現在、アキノ大統領とMILF反政府組織が自治州をめぐる交渉を始めているが、今後も予断は許せない。ミンダナオ子ども図書館は、個人寄付で運営されている非政治団体で、政治や特定の宗派の元では行動しない規定を持つ。それ故に、政府側にも反政府側にも組みたくないし、宗教的啓蒙活動も行わない。ただひたすらに、こうした非条理な状況の犠牲になっている子どもたちの事を考えて行動してきた。

「子どもたち、特に不条理な状況に置かれている子どもたちへの愛」これが、活動の原点。

洪水が発生する山岳地域は、本来ジャンルだったのだが、度重なる伐採で木材、とりわけラワン材が、高度成長期の日本に輸出された結果、森はミンダナオの6%しか残っていない。

そこに降った豪雨が、下流に住むイスラムの人々の地域を鉄砲水となって襲い、東アジア最大と言われている湿原地帯を直撃する。湿原地帯には、土地を持たない貧しいイスラムの家族などが、中州などに家を建て、2000世帯あまりが、半農半漁で生活しているのだが、軒に届くような洪水の結果、多くの、特に泳げない幼い子どもたちが亡くなっている。さらにその湿原地帯から、膨大な天然ガスと石油の湧出が確認され以来40年、鉱物資源をめぐる利権争いが続いてきた。



戦闘の時も当然だが、洪水などによる避難民救済や食料支援、そして平和なときも読み語りや医療や植林支援で、私たちはゆっくりだけでも絶えることのない関係を10年に渡って持ち続けてきた。なかでも子どもたちの心に深く残る読み語りや医療、小学校から大学まで行けるスカラシップは、コミュニティとの信頼関係を継続する意味で、平和構築に役立つばかりではなく、極貧家庭や集落から、将来の人材が輩出する事で貧困撲滅にも役立つと思う。

その意味で、読み語りや文化活動について、有益なものの一つがスカラシップ里子支援だろう。

ミンダナオ子ども図書館・支援方法

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日3食たべられないときと、
お金がなくて、学校に行けないとき
病気になってもお医者さんに行けないとき・・・



1. 医療や読み語り活動を、支援して下さる方々へ・・・自由寄付

自由寄付は、戦争難民救済や医療、広範囲に広がる村々とのコミュニケーション。支援者に紹介する以前の成績が不安定な極貧の子たちの学費。片親や孤児、障害を持った子などが120名あまりが暮らす本部、および学校に遠くて通えない子どもたちの山の下宿小屋、大学生たちの町の下宿施設の運営費や食事代など・・・活動費の根幹を支える寄付です。
機関誌の購読料のつもりで、少額でも結構です！よろしくお願ひします。
機関誌は、4月、6月、8月、10月に加え12月にクリスマス新年号を年五回お送りしています。

2. スカラシップ支援（大学生と高校生）・・・年額60000円（月額5000円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて一部振り込んでいただければ、支援学生を紹介。機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、6月に成績表、8月に写真、12月に絵手紙が届きます。文通も可能。訪問の際は、自宅にご案内します。支援停止は、いつでも可能です。支援は、授業料の他に、学用品代、米代、下宿代、各種プロジェクト代、お小遣いに使われます。大学生は、年額6万では無理ですが、高校のスカラシップや自由寄付で通えるようにしています。

3. 里子支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）

振り込み用紙に「里子」と書いて、一部振り込んでください。8月に写真。本人からは、12月に本人が描いた絵手紙をお届けします。支援停止は、いつでも可能です。
2ヶ月に一回、僻地の学校を訪問しては、学用品を支給し、プロジェクト代や場所によっては、お弁当用の米を支給しています。訪問の際は、村の自宅にご案内しています。

4. 保育所・下宿小屋建設・・・30万円（分割も可能）

振り込み用紙に「保育所」と書いて振り込んでいただければ幸いです。戦闘や政情不安定などの影響で、翌年にずれ込むこともあります。建設結果はウェブサイトにて報告すると同時に、毎年10月の機関誌とともに、その年の保育所の状況写真をお届けしています。

5. 植林環境支援・・・6万円（コムの木600本、1ヘクタール、現地の作業代）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、生活自立支援です。参加も可能です。

6. 古着などの物資支援・・・ウェブサイト参照。手渡し参加も可能です。

ウェブサイトにて、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

郵便振替口座番号 00100 0 18057 : 加入者名『ミンダナオ子ども図書館』

インターネットバンキング *銀行名 ゆうちょ銀行 *金融機関コード 9900

*店番 019 *預金種目 当座 *店名 ○一九店(ゼロイチキユウ店) *口座番号 001857

ミンダナオ子ども図書館は、フィリピン現地法人 NGO です。
問い合わせは、メールが最適 mindanao@zap.att.ne.jp
電話は、080-4423-2998 (松居友：日本および現地転送携帯です)
現地携帯 09219603640 フィリピン国内ではこの番号に
日本事務局：Fax 専用 093-473-7710
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City N. Cotabato 9400 Philippines
<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>